

「加盟60年の時点から一理想と現実のはざままで」

明石康氏 (U. of Virginia 1955)



国際連合加盟60周年にあたり、わが国と国際連合の関係について私の見解を表明できることを大きな光栄と感じております。1956年12月18日ニューヨークは凍てついた寒い日でした。フルブライト留学生として、私はわが国の加盟の情景を目撃し、それを眼底に焼き付けることができました。総会議長タイのワン殿下はじめ、日本の国際社会復帰を祝う各国代表の言葉は、温かさと期待に満ちていました。

加盟に当たって重光外務大臣は、「国際社会の名誉ある一員」としての日本の覚悟を述べました。国連の前身たる国際連盟を脱退して23年にわたる時間を経ての檜舞台復帰には、孤立した時代への反省が込められ、国際平和の大道を再び歩む日本国民の決意が表明されていました。わが国は加盟直後から活発な外交を展開し、加盟翌年には、非常任理事国の議席を射止め、それから11回にわたって他国をしのぐ記録を打ち立てて現在に至っています。当初から、レバノン問題やラオスをめぐる緊張に際し、わが国代表は、地味ながら建設的な役割を果たしました。政治、安全保障以外の経済、社会、人道面の国連活動においても、幅広く行動してきました。

日本が加盟した1956年秋、国連はスエズ運河をめぐる危機とソ連のハンガリー侵攻問題に直面しました。スエズに関しては英仏の拒否権行使がありましたが、緊急特別総会が国連緊急軍を設立することで危機を脱出し、ハマーショルド事務総長とレスター・ピアソン・カナダ外相はその功績でノーベル平和賞を授与されました。他方、ハンガリー問題では、国連の限界が明らかになり、栄光の時もあるが失意に沈むこともある国連の、山と谷を示すことになりました。しかし全体としては、冷戦の時期においてさえ、国連憲章の弾力的な解釈によってかなりの成果を上げたのを見逃すことはできません。中東地域の平和、インドネシアの独立、印パ戦争、キューバのミサイル危機などがその例です。安保理事会が拒否権で阻まれても、特別総会を通じて朝鮮戦争に積極的に関与できました。また国連の道義的支援のもとに植民地が次々に独立し、国連に加盟していったのも顕著な事実でした。

人権をめぐるのは、1948年の世界人権宣言から60年代の拘束力ある人権規約採択を経て、90年代の人権高等弁務官設置とそれに続く人権理事会設立に至る巨歩が見られました。加えて、開発途上の国々の発展や地球環境改善のための動きも加速化され、2000年に総会が採択したミレニアム開発目標に続いて地球規模の持続可能な開発をめざす新しい宣言が採択され、全ての国々が前進するための処方箋ができたといえます。しかし、先進国と途上国の激しい南北対立の時期もあり、両陣営が互いに非妥協的な立場をとったので、漸進的な政策をめざすわが国は苦境に立ちましたが、中道的な立場を保ち、90年代には他の先進国をしのぐODAの実績をあげました。

冷戦が終結した1989年を境として、わが国はポスト冷戦期の明るい展望の中で、紛争予防のために積極的な姿勢を取り、他方国連による平和維持の強化をめざして、92年には国際平和協力法が採択されてカンボジアのUNTACに自衛隊や文民警察官が早速参加できるようになりました。核兵器、化学兵器や通常兵器における軍

縮ないし軍備管理をめざす面でも、わが国は貢献しました。90年代において国連はソマリア、ルワンダ、旧ユーゴスラビアなどで、民族、宗教、部族紛争の中で困難を味わうことになりましたが、それを経て伝統的な停戦監視ないしは国造り型の平和活動は、アフリカの一部でいわゆる「強力なPKO」に変貌をとげ、多様化されて現在に至っています。

ニューヨークの国連本部は、各国首脳による定期・不定期の頻繁な会談や協議の中心となっていて、国際社会の共通課題について合意を目指す交渉が絶えず行われています。その結果、新しい国際基準やルールが確立されるのも決して珍しいことではありません。安保理事会の改革に関しては、利害や意見の対立が大きく、妥協を見出すのは大変困難な状態にあります。しかし、諦めることなく、幅広く意見を交し進捗を目指すしかないのではと考えます。国際社会の一層のグローバル化や組織化をめざす大きなうねりがある一方で、各国では内向き傾向やナショナリズムの揺り戻しも強くなってきております。国連中心の多国間外交が主流となることもあります。また、大国による単独外交や二国間外交への回帰も見られます。まだるっこいようですが、やはり国連を中心とする多国間取組みの利点をきちんと把握して行動してゆくべきではないかと思えます。

目まぐるしく展開する世界情勢であります。わが国は地球的な展望を見失うことなく、平和と国際協調の更なる強化をめざし、国連加盟以来のゆるぎない姿勢と理念をこれからも堅持して行ってほしいと考えております。